

平成10年度大学図書館職員長期研修に参加して

附属図書館受入掛 島 文子

大学図書館界では、表題の研修のことを「長研（ちょうけん）」と呼び慣わしています。これに参加したことのある人（長研経験者）にとって、長研は一種独特の意味を持つものようです。例えば、「〇〇さんとは長研の同期で、…」と会話が始まる場合は、その人たちが並々ならず親しい間柄であるということを示しています。また、その語り口には青春の日々を懐かしむような追憶が込められていることが多いのです。「長研」は何か輝かしい連帯感を呼び覚ます符丁のようで、私もいつかは経験してみたい…と、ひそかにあこがれていた研修でした。その長研、大学図書館職員長期研修に今年参加させていただけることになり、わくわくしながら3週間の研修へと出立しました。

今年度の大学図書館職員長期研修は7月13日から31日までの日程で行われました。参加者は国立大学（国立機関含む）35名、公立大学1名、私立大学6名の総勢42名です。思慮深そうな男性陣と元気でにぎやかな女性陣の組み合わせで、緊張の中にも楽しい雰囲気です。研修初日が始まりました。1週目はつくば市の図書館情報大学、2～3週目は東京のオリンピック記念青少年センターが主な講義会場ですが、その他にも筑波大学、東京大学、慶應義塾大学、国立国会図書館、国文学研究資料館、東京工業大学図書館などさまざまな見学コースが設けられています。講義の内容は、電子図書館のような図書館界のトレンドな話題から、上手なマニュアルの作り方や職場での健康管理まで、バラエティ豊かなものです。なんだか久しぶりに学生気分がよみがえってきました。

ところがうきうきしていたのもつかの間、グループ討議の日がやってきました。私の討議テーマは「さまざまな媒体の資料収集の在り方と不足する図書館面積への対応について」というものです。この中で、全国の大学図書館の深刻な実態を聞くことができました。例えば、大学改組で部局に置ききれなくなった資料が図書

館にどんどん運び込まれ、書架の間に積み上げてある話。歴史ある書庫があって、毎年資料のカビ取り作業に追われる話。100年もつはずのマイクロフィルムの部屋に入ると、つんと鼻を突くにおいがする話。資料費削減と雑誌価格の上昇のために学生用図書がほとんど購入できなかった話。大学改組のたびに数万冊の図書の供用換を繰り返す話… などなど。驚くようなものもあれば、共感するものもありましたが、なかなか解決方法の見だしにくい問題ばかりです。利用者によりよいサービスを提供しながら、効率的な管理をしていくにはどうすればいいのだろうかという図書館員としての苦渋が、どの人の表情からもにじみ出ていました。さらに、私には運良く（！）記録者役が当たっていたので、この討議の後、報告書づくりにも四苦八苦することになりました。

長研が3週目に入った頃から早くも、連絡先名簿を作ろう、同窓会を作ろうという声に参加者の中から出始めました。グループ討議や懇親会や夜の交流会などで参加者どうしが急速に親しくなっていました。みんなで何をやっても愉快で、会話にも笑いが絶えません。「こんなに楽しい研修は初めてだな（来週職場に復帰しても大丈夫かしら…）」と考えるようになったときから、私はきっと「長研経験者」の仲間入りをさせてもらっていたのでしょう。「仲間づくり、ネットワークづくりをしっかりとやってきなさい」という研修出発前にいただいた職場の上司のおことばを、心の底からありがたく感じました。

例年この時期は猛暑が続き、講義も見学も暑さとの戦いと聞いていましたが、なぜか今年は非常に涼しくさわやかな天候でした。ことに長研最終日は抜けるような青空が広がっていました。講義室の高い天窓から見えたすがすがしい空の色は、楽しかった長研の3週間の出来事とともに、私の一生の思い出になると思います。

（しま ふみこ）